

1. 実施概要

(1) 日時：平成24年11月2日（金） 14:00～17:15

(2) 場所：小杉苑

(3) テーマ：～「選ばれるまち」を目指して～

コンパクトシティによる街なか居住とにぎわいづくり

人口減社会、超高齢社会におけるコンパクトシティの必要性―

(4) 進行

14:00～14:10 開会

- ・主催者挨拶 内閣府地域活性化推進室次長 横山 典弘
- ・開催市挨拶 藤枝市中心市街地活性化協議会会長 小林 正敏

14:10～14:50 基調講演

- ・関東学院大学経済学部教授 横森 豊雄

14:50～15:55 自治体事例紹介

- ・富山市長 森 雅志
- ・藤枝市長 北村 正平
- ・塩尻市長 小口 利幸

15:55～17:15 パネルディスカッション

- ・コーディネーター：横森 豊雄
- ・パネラー：藤枝市長、塩尻市長、横山 典弘

17:15 閉会

2. 開会の挨拶

- （主催者）中心市街地活性化法は平成18年に抜本的な見直しがされ、6年が経過している。このあり方についてレビューをしようということで、シンポジウム開催を企画したが、多数の市が手を挙げていただきその熱意の高さを感じた。全国21の市で行われるが、いただいたご意見等は、今後開催を予定している中心市街地活性化評価・調査委員会に報告し、今回の議論を活用するべく努力をしていきたいと考えている。
- （開催市）旧中活法以前から商店街の衰退や人口減少などいろんな問題が続いており、6年前に法律が変わったが、改めて我々もそういう視点にたった考え方の必要性を感じている。藤枝市においても平成20年に認定をいただき目標の90%は達成したが、まだまだ課題も多い。歩行者通行量の増加、宿泊者の増加、公共施設の利用増は達成したものの実感は薄い。今回は情報を共有する中で、お互いのまちの活性化が図れればよいと思う。

3. 基調講演

《少子高齢・人口減社会における中心市街地のあり方について》

- 昭和40年頃の地方の各都市は駅を中心にいろいろな施設が集まり、公共交通も発達し多くのにぎわいがあった。それが郊外への大規模住宅団地、バイパス道路、大型店舗の進出などで衰退していった。そして今、郊外のニュータウンでは限界集落化が進んでいる。

- 再生のためには、中心商店街の振興という対症療法ではなく、構造的な「コンパクトなまちづくり」という原因療法が必要になってきたということ。誰もが快適に暮らせる、高いクオリティ・オブ・ライフが原則だ。東京では6割の車が通過交通だが、そういったことを排除しなければコンパクトシティはできない。



- D I D（都市的地域）の人口密度が高いほど自家用車の利用率は低く、公共交通機関の利用率は高くなる。さらにCO2排出量も少ない傾向にある。また人口密度が低いと汚水処理のコストも高まる。環境と資源の保護のためにもなるということ。優良農地も開発のために使われていって減少している。
- もっとも深刻な問題ともいえる、健全財政の維持がある。青森市では郊外に広がった市街地を維持するために、学校や上下水道などで過去30年間で350億円も投資してきた。厳しい財政状況の中でこれをどうにかしないといけない。他の自治体でも財政状況は厳しい。人口が拡散すると公共交通は成立しない。だから発想の転換で、そもそも、赤字をどう補填するかを考えなければならないだろう。
- コンパクトなまちづくりの方法としては、イギリスでやっている車の両輪が必要。片輪はマスタープランによる中心市街地振興、もう片輪は中心市街地への誘導と商業等開発の自治体間の広域調整。そのためには、中心市街地活性化法や都市計画法をうまく使えるようにしていく必要があるだろう。

4. 自治体事例紹介

(1) 富山市（富山県）

- 富山市は、公共交通に積極的に公費投入をする、沿線に住む人を緩やかに誘導する、中心市街地を魅力的なものにするという3点で、これ以上の拡散を止めたいという考え方だ。第一期の目標は、5年間で路面電車



の利用者を 1.3 倍に、中心商店街の来街者を 1.3 倍に、中心市街地の居住者を 1.1 倍にするという 3 つを柱に様々な事業に取り組んできた。

- ハード整備でいちばん大きな取組みは路面電車の環状線化で、中心市街地への来街者は大幅に増える見込みだ。事業費 30 億円だが国の補助金を 13 億円入れていただいた。民業である交通事業に積極的に税金を使うのを市民の方が納得してくれるのだが、どの地方都市もこれをやらないとまずもたない。
- 電車で来ると車で来る人より滞在時間が長い。また来る回数も多い。さらに消費金額も多くなるというデータが出ている。その要因はアルコール類などの飲食と思われる。とくに大きな再開発でヨーロッパの広場のようなグランドプラザという広場をつくった。土日はずっと先までイベント等の予約で埋まっている状態だ。
- 「お出かけ定期券」は 65 歳以上の方に限り、中心市街地で降りればどんな遠くから来ても 100 円というもの。一日 2200～2300 人の方が利用している。また、まちなかの共同住宅建設への助成、自転車の共同利用システム、まちなかを積極的に花で飾る事業も行っている。電車は、外国から来た人は無料、県外から来た人は半額。これらはホスピタリティだと思っている。車ばかりの社会からもっと質の高い暮らしを実現していく、そういう地域に誘導していきたいと思っている。

(2) 藤枝市

- “元気なまち藤枝づくり”を大きなテーマとし、その行く先として“選ばれるまち・藤枝”に向かってやっている。訪れて欲しい、住んで欲しい、を究極の目標にしている、その受け皿となるのが中心市街地だ。
- 図書館、公園、文化センターなど、ハード・ソフト合わせて 72 事業を展開している。基本計画の認定を受けたことにより国交省の事業として、区画整理や文化センターなど公共施設のリニューアルといった、既存のものをフルに活用することで取り組んでいる。ソフトでは、にぎわいづくりに効果がある「てーしゃばストリート」などがある。
- 経産省関連では、戦略的中心市街地商業等活性化支援事業費補助金を活用し、B i V i 藤枝やオーレ藤枝など民間の投資を呼び込むこともやっている。また総務省では、中心市街地活性化ソフト事業をやらせていただいている。
- 成果として歩行者通行量が目標を上回り、宿泊客数も規準年の 3 倍に増えた。各種大会やイベントに来る人もいて、周辺の飲食店にも波及効果がある。公共施設の利用者数も滞在時間も増えてきたのが特徴だ。これにより中心市街地の人口の伸びが見られている。まちづくりへの参加意識が高まり、全体事業費の 3 分の 2 が民間資金となっている。
- 第二期計画では、特に「広域拠点性の向上」に重点を置き、焼津市や牧之原市、島田市などとの広域連携をとっていくことを目指していく。テーマとしては“選ばれるまち”に向けて、まちなか居住の推進、コンパクトシティへの転換を図っていく。商業複合施設やタウンプロモーション事業など 59 事業を進めていく考えである。

(3) 塩尻市（長野県）

- 中心市街地は言うまでもなくまちの顔と思う。現在、塩尻駅前の交通発着ゾーンと行政文化ゾーン、そしてコミュニティゾーンの 3 つを核に整備を進めている。中高生が自転車で行け

て、駅や学校の近くにある図書館じゃなきゃ市民図書館と言えないでしょう、ということでもこういう場所につくった。当初目標は40万人だったが今は年間60万人の方が訪れている。

- 名古屋の法人と連携ができて、駅前には特養の福祉ビルを建てた。1階に保育園があり、レストランもでき、駅前にはほかに観光センターもできた。また「えんぱーく」は、1階2階が図書館で、3階のフロアまで市が買い入れ、商工会議所などが入る4階5階は民間に買ってもらった。ウィングロードは、イトーヨーカドーが撤退したビルを市が1億円で買い入れ、テナントが入っている。ここは公共交通を使ってくる人が多い。
- 歩行者、自転車通行量は増加。人口密度は残念ながら目標に届いていない。自立した自治体であるためには、まちの顔は必要であろう。これから知恵をお借りしながらチャレンジしていきたいと思う。

6. パネルディスカッションの概要

《選ばれるまちを目指して コンパクトシティによる街なか居住とにぎわいづくり》

- (コーディネーター) まずは事例のご感想などを横山次長からお願いしたい。
- (横山次長) 各市それぞれの個性、特性に応じた取組みを首長自らされていると非常に感じている。この後シンポジウム、委員会などをさらに進めて取組みを政策に活かせるように関係省庁と連携をしながら進めていきたい。
- (藤枝市長) 藤枝市は県内で4番目に昼の人口より夜の人口が多い市、昼は静岡に移動していて、JR東海道沿線の中で乗降客数がいちばん多い。そういうものを活かした駅周辺などの活性化が必要。人口は増えており、特に子供の数が増えている。そこに住み良さがなくてはいけない。健康、教育、環境、原発を含めた危機管理の4つを良くしていけば魅力のあるまちになると考えている。
- (塩尻市長) 広域の連携で言えば、長野県は全国でも一番二番に広域連合の機能が充実している県と言われている。松本市、安曇野市、塩尻市と5つの村で松本広域連合を形成している。たとえば体育館などを共有したりしている。
- (横山次長) 広域連携の話では、この前九州でも同じような話があった。役割分担もあるが、同じ役割ではまちの個性が失われるという話もあった。どうしても交通の便の良いところに止まってしまうという話もあった。
- (コーディネーター) 中心市街地とそれ以外の利害の対立というものもある。富山市では市長が非常に積極的に市民の中に入って行って、頻繁にタウンミーティングなども行っている。市長がリーダーシップをとって市民と対話するのは



中活の成功にとって重要な要件でなはいか。

- (塩尻市長) 私も市民の皆さまと議論を繰り返した。ワーキンググループを3つほどつくった。ある程度の方向をワーキンググループの報告書という形で出したので、それからはやりやすくなったというのが実感だ。
- (藤枝市長) 駅周辺や旧藤枝など、発展の方法は違うと思うが、それぞれ特徴をもって発展する道があると思う。地域によって福祉ゾーンとか、文化・歴史ゾーンとかそういった形で発展の糸口をつけるのがいいと思う。今、市政をやっていく上でいちばん大変なのは商店街の活性化と農業の振興。共通しているのは担い手がないということだ。国、県、市と綿密に連携をとってやるのが今こそ大切な時だと考える。
- (藤枝市長) 静岡市在住の方が藤枝に来る主な場所は2ヵ所あって、1つは電車で来る方が多いB i V iのシネマコンプレックス、もう1つは、マイカーで来る方が多い蓮花寺池公園。残念ながら商店街には来られない。やはり行ってみたいという魅力が大事だ。B i V iの中に公共スペースとして子育て支援センターをつくらせてもらったが、そこは大変賑わっていて効果があると思う。
- (塩尻市長) 100%ではないが、行けばなにか役に立つ時間が過ごせると感じてくれる方が増えていると実感している。これに拍車をかけていくのが、若手のまちづくり会社で、これがいかに元気になっていくかが滞在人口を増やすことだと確信している。
- (横山次長) 個々の商業者がかなりの魅力づくりをしていかないと、なかなか消費者の声に応えるのは難しい。そこを頑張れば離れている人も買いに来てくれるのではないかと思う。人と人がふれあうのが中心市街地の魅力。地域との接点があれば、自分のまちだという感じも出てくるのではないだろうか。

7. 閉会